Ⅱ 細菌病理科業務及び調査研究事項

1. 業務検査成績 （自昭和34年1月至昭和34年12月）

検査項目		検査件数
一般培養検査	ブドー球菌．溶連菌．ジフテリヤ菌等	70
糞便検査	赤痢菌．サルモネラ菌属及び其の他の菌検査	899
	原虫．寄生虫の検査	6
食品の細菌検査	食中毒菌．其の他の菌検査	177
血液培養	胆汁培養	51
其の他	ウイダール．ワイル．フエリクス反応	82
淋菌検査		19
結核菌検査	顕微鏡検査	82
	培養検査	295
	耐性試験	224
梅毒血清学的検査	補体結合反応	3,261
	ガラス板法	3,261
	凝集法	3,261
臨床試験	尿糖．蛋白．血液像．血球計算．潜血反応．其の他	92
血液型		42
妊娠反応	フリードマンテスト	6
病理標本作製		8

2. 甲府保健所管内某観光地域飲食業者の従業員に対して行つたSalmonella, Shigella病原性大腸菌及びパラ大腸菌群の検索成績について

小沢尚夫　伏見重友　有泉　昇　野中伴春　山下　尚

昭和34年6月，県下某観光地湖畔の観光ホテルにおいて従業員及び観光客をも含む赤痢の集団発生事件があつた．

甲府保健所においては，この種の不祥事の未然防止の為め，この際，特に管内観光地の環境衛生，並びに食品衛生の積極的改善を強力に推進したが，当所においては，之等地域の食品業者の保菌者検索を担当した．

当所に兼ねてより人体の胃腸系疾患との関連性について種々論議されて来た病原性大腸菌と1954年Kauffmannの腸内細菌科の分類に依つてEscherichia属に組入れられたBethesda-Ballerup及びTribe SalmonellaのGenus，Arizonaに新に位置を占むに至つたArizona等の菌群が，健康集団間に如何なる率に保菌分布されているかに就いて検討を重ねて来たのであるが，この機会においてもShigellaの検索と同時に，之等菌群の検索を行つた．其の成績は次の通りである．

実施期間　昭和34年6月15～25日

実施要領

現地に各種培地を運搬し直接採便に依り検体を採集した．

分離方法

Drigalski培地並びにSSagarを使用し1検体毎に各2枚を使用し37°C24時間培養后，発生せる集落について検討を行い，乳糖の分解全くなきか，又色調の変化著明ならざる集落を1検体毎に10株を選び,Kligler培地に分離移植し,其の所見一/Aは,Shigella,一/AGは，Salmonella．病原性大腸菌及びBethesda，Ballerup，Arizona等の各種免疫血清を以つて試験的凝集反応を行い，夫々の血清に示した凝集反応陽性株に対し，各々生物学的諸性状を検し得た成績は次表の通りである．

検査総人員385人中

1，	病原性大腸菌保菌者数	22人	5.8%
2，	パラ大腸菌群保菌者数	16人	4.2%
3，	Shigella保菌者数	4人	1.04%

内訳

病原性大腸菌22人の中

0〜124	8 人	36. %
0〜125	4 人	18. %
0〜 75	2 人	9. %
0〜 25	3 人	12. %
0〜 44	2 人	9. %
0〜 86	3 人	12. %
0〜 55	1 人	4.5%

パラ大腸菌16人の中

Bethesda	13人	80.%
Ballerup	2人	13.%
Arizona	1人	6.%

Shigella385人中

F2a	2人
SonneII相	2人

3. 食中毒事例

伏見重友

昭和34年中，本所において，取扱つた食中毒事例の原因菌検索は，次の3例である．其の中2例は葡萄球菌，1例はPrateus morganであつた．

No. 1例

発生場所　中巨摩郡甲西町

発生月日　昭和34年5月8日

患者数　1家族7人全員

推定原因食品　グリンピース煮豆

潜伏期　6乃至8時間

主な臨床症状　嘔気，嘔吐，1日数回の水様下痢便，激烈の腹痛，裏急後重．及び発熱なし．

経過　2〜4日快復

原因菌の分離　分離方法　使用培地　乳糖加BTB寒天培地，デスオキシコレート寒天培地，スタヒロコツカスNo.110培地，テルライトグリシン培地，血液寒天培地，カウフマン増菌培地．

分離菌株　検体(食品)の一部を塗抹したスタヒロコツカス No.110培地上にほとんど純培養の如く．Staphylo coccusの発育を見た．この菌株5株についてM.C.N.H試験を試みたところ，次の成績を得た．

項目＼菌株番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
monnitol 分解能	—	—	—	—	—
血漿凝固性	—	—	—	—	—
7.5% Nacl 耐性	++++	++++	++++	++++	++++
溶血性	α	α	α	α	α

以上の所見より本中毒事例は Staphylo coccus epidermidesに起因するものと推定される．

No. 2例

発生場所　甲府保健所管内7号台風災害復旧工事飯場

発生月日　昭和34年8月31日

患者数　34人中23人

推定原因食品　小豆あんクリーム

潜伏期　7〜8時間

主な臨床症状　発熱37.5〜38.5°C．腹痛（時間の経過に従つて，上腹部より下腹部に移行す）下痢，水様便，最高12回平均4回，嘔吐（発症当初1日2〜14回）

原因菌の分離　分離方法　使用培地は1例の項に記載せるものを夫々使用した．

分離菌株　患者の糞便，吐物，よりほとんど純培養の如く Swarwing Phenomenon を呈するグラム